

「尚書集注音疏述」と『説文解字注』の符合挙例

吉田 純

『尚書集注音疏』の著者江声が『説文解字』の注釈に手を染め、段玉裁の『説文解字』研究を見て心服し、筆を擱いて稿本を段玉裁に与えたことは、夙に狩野直喜『中国哲学史』に記され、^①広く知られた事柄である。それは今『碑伝集』巻百三十四に収める孫星衍の「江声伝」に次のようにある。

江声、字は叔灋、号は艮庭、江蘇省元和の人である。漢の江革から数えて五十七代目の子孫で、六代遡る先祖の禹奠は、休甯から呉門に遷居し、孝行を施したことは、方志に記載されている。曾祖父は大浙、祖父は文懋。父は黔で声を生み、全部で兄二人、弟一人がいる。声は幼い頃から児戯を好まず、聡明さは並外れており、七歳で家庭教師に従って読書し、読書は何のためにするのかを問うと、教師は科挙に及第するためだと答えたので、声はこれに進む手だてを求めた。父親は元々鑄金を生業としたが、既に原価を割って処分し、無錫に居住したので、声は兄と塾師をして養った。二十九歳で、父の廃疾に遭い、朝晩しとねに侍って着衣を解かず、手ずから薬用の食物を作り、自身で便器を洗うまでし、汚穢を

見て病気の加減を確かめた。喪中に及ぶと、哀傷で骨ばかりに瘦せ、三年を超えても、姿は悲しげで喪に服したてのようであった。母の廃疾に侍り、喪に服すのも、やはり父が没した時と同様で、身内のものはその至上の行いを不憫に思った。孤児となったことで、もはや科挙のことからは手を引き、専ら経書の意義と經古文学を好み、許慎の『説文解字』を入手すると、喜んで温習して、「私は読書するには先ず字を知らねばならないと始めて知った」と言った。三十歳で同郷の惠棟徴君に師事して、疑義難問を質し、門下に身を置き、学問は日に日に進んだ。

四十一歳で始めて『尚書』の学問に着手し、唐の貞観の時諸々の經の正義を作るのに、毛詩、三礼、春秋公羊伝の他は、いずれも晋人の手になる後出の注を取り、反対に漢代の専門経師による所説を伝えないのを憂いた。惠棟徴君はすでに『周易述』を著し、經古文学を深く研究していたが、声も『尚書集注音疏』を著し、今文二十九篇を保って、梅賾が献上した内の偽作二十八篇と辨別した。書伝に引く湯征、太誓

①『尚書集注音疏述』と『説文解字注』の符合挙例(吉田)

諸篇の逸文を取り、「書序」に依り載録した。さらに『説文解字』、經部子部の典籍に引く『尚書』の古文と本字の書体を取り上げて、秦代の隸書および唐の開元年間に古字を改変した誤謬を訂正した。鄭玄の残存する注と漢儒の逸失した所説を輯佚し、みずからの見解を附してそのための疏を著し、自説に根拠が有るのを明らかにした。小篆で經文を書くことで、夏殷周三代の元々の文字に回歸し、下書きを都合四度書き換え、十余年の歳月を重ねて、僅かな欠点があるとはいえ大部分の純正なことは覆い隠すことが出来ない。当時王鳴盛光祿寺卿は『尚書後案』を著し、やはり鄭玄の所説を疏通証明し、經古文学を考察研究しようとの著書であり、声を自宅に招き疑義を協議訂正した上で、始めて世間に広められたのである。

声はさらに後世になると『説文解字』序にいう「考」「老」が転注だとの意味を考え過ぎ、小篆の字迹で追求するまでになったのを憂いて、『六書説』を著し、次のように言った。『説文解字序』にいう「建類一首」とは、起一終亥の五百四十部の部首に他ならない。同じく「同意相受」とは、各部首の下に「凡そ何々の属、皆何々に从ふ」とあるのに他ならない。嘉定の錢坫判官はこれを是認した。私もその説を推し広げ、思うには、『爾雅』釈詁上の「肇、祖、元、胎」の類は「始」也であって、「始」も「建類一首」であり、「肇、祖、

元、胎」が皆「始」であるのも、「同意相受」である。『説文解字』のこれに似たものも大変多く、「考」「老」の訓を推し広げると、「口」部の「咽、噎也」「噎、咽也」「走」部の「走、趨也」「趨、走也」など、「考」に「老」と注し、反対に「老」に「老」と注するのと丁度同じである。それらが共に「口」部、「走」部に在るのが「建類一首」に他ならない。声も左様に考えたが、戴震編修は全部首を貫くので意味が広すぎると考えた。声はこれを咎めて、「もし僅かに『考』『老』だけを転注とするならそれで狭過ぎはしないか、さらに(六書の)諧声という意味にしろ全部首を貫きはしないのか」と言った。声と戴君は学問を通じて推重し合っていたが、このように附和することがなかった。さらに『説文解字考証』を著したが、段玉裁大令が著したものに因らずも符合する内容が多いのを見て、そのまま筆を擱き原稿を全て差し出して段玉裁に与えた。^③

父親の看護の様子には江声が至誠の人であることが見て取れる。科擧から身を引いて任官せず、『説文解字』の研究を根柢にした『尚書』学に没頭し、その所産も小篆で刊刻するというのは世俗に馴染まないが、蘇州に住まいしつつそれができたのは、財産に恵まれた上でのことであつたろう。

上で孫星衍が挙げた『説文解字』の二例はたまたま互訓の関係にあるため、転注を互訓のこととする説と少しく紛らわしい

ので、江声の『六書説』から要所を引く。

転注とはこなたから転じてゆくのである。あちらの注を取ってこちらにそれを注するのと同様である。たとえば「考は老なり」の「老」字は、会意文字に属する。人は老いると「須も髪も白く変わる」から、「老」字は「人毛匕に从ふ」、これは三字を合わせて意味を形成するものである。「老」字を部首として立てることが所謂「建類一首」である。「考」は「老」と意味が同じであるから、「老」字を受けて「老の省に从ふ」。「考」字の外に「耆」「耄」「耋」「耄」といった類など、一体に「老」字と意味が同じものは、いずれも「老の省に从」って「老」に属する。これは一字の意味を取って、複数の字をまとめるもので、所謂「同意相受」である。許叔重が「老」に対し「考」を言うだけなのは、一字を挙げて残りの字に対する例としたまでである。これによって推し広めると、『説文解字』という書物は、全部で五百四十部に分かれるが、その部分けが「建類」に他ならない。その起一終亥の五百四十部の部首が、所謂「一首」に他ならない。下に言う「何々の属、皆何々に从ふ」が、「同意相受」に他ならない。これがいずれも転注の説き明かしである。⁽⁵⁾

江声には『説文解字考証』の専著があり、段玉裁の所説と多く符合していたという。しかし、段玉裁が『説文解字注』を著す過程で、この江声の『説文解字考証』を参考にした旨の記述は見当た

『尚書集注音疏述』と『説文解字注』の符合举例(吉田)

らない。すると江声の『説文解字』研究が段玉裁の『説文解字注』と実際に符合するかどうかを確かめる一つの方法は、江声の『尚書集注音疏』に散見される特異な用字を『説文解字注』の中に探り、その所説を検討することである。

段玉裁の『尚書集注音疏』に対する所見として、古国順『清代尚書字』が「古文尚書撰異序」から引く二条がある。

新奇を嗜好する手合いには、唐から今に至るまで、篆書を集めて編録記述した『尚書』がある。⁽⁷⁾

しかし続く双行の自注を見れば、これが薛季宣『書古文訓』に体现される宋次道王仲至家本を指すことは明らかであり、『尚書集注音疏』を批判したものではない。

強いて『説文解字』所引の『尚書』に従い『尚書』経文を改変するなら漢代の元のままでなく、さらに経伝、先秦諸子に引く『尚書』を取り上げて『尚書』経文を改変することがあれば、『尚書』は完膚無からう。⁽⁸⁾

孫星衍の伝にもある通り『尚書集注音疏』には逐一注記して『説文解字』所引の『尚書』に従い経文を改めた箇所がある。右で省かれた前文を補う。

『説文解字』に引く『尚書』は多くの場合『尚書』経文と同じでない。孔安国が孔子旧宅から出た古文尚書を今字に読み易えたことから、許慎はその元のまゝを保存している。『周礼』の杜子春、鄭衆、鄭玄がその字を読み易えたのを経て、

書いて伝える者は既に読み易えたのに従うが、注の中に故書の元のまゝを保存しているのと同様だ。『周礼』を尽く故書に従って改めることはできないから、『尚書』を尽く『説文解字』に従って改めることはできないのである。^⑨

『尚書』の新疏であれば経文は過去実際に流通した通り記されるべきで、段玉裁の言い分は正しい。しかし江声が『説文解字』所引に従うことで、時として古の正しい用字を示し得た諸例に以下は着目してゆきたいのである。

『尚書集注音疏』から特異な用字を見出す範囲は本来なら全書十三巻とすべきであるが、本稿は調査途上の報告であることから、数多くの例が頻出する巻末の「尚書集注音疏述」とする。『述』は謙辞で「敘」のこと、『尚書』の沿革について手際よく纏め自著の目的をも示す。古典籍を引用する際には必ずその出典を明記しており、江声の教育的配慮が窺われる。

よく知られた事柄であるが、江声は日常の筆記も楷書を用いず小篆で書いた。江藩『国朝漢学師承記』の江声の伝にそのことが次のように記されている。

普段も楷書を書かず、人と手紙をやりとりするにしても、全て篆書で書いたので、目にする者は天書符籙かと怪訝に思い、つまらぬ儒者はしばしば悪しざまに笑ったが、先生は意に介さなかった。^⑩

とあれば「尚書集注音疏述」の底本も本来なら篆字本を用いるべ

きであるが、読解と印刷の便を考慮し、とりあえず『皇清経解』所収本を用いる。ただ何分蕪雑な憾みがあるので、逐次篆字本を参勘して文字の異同を確認した。

なお本稿は江声・段玉裁両者の説文学に関わる綿密な論考を企図したものではなく、実際の符合例を列挙して後日の考察に備える研究ノートであることを、あらかじめお断りしておく。

以下の符合例には通し番号を付した。難読なものには「」内に通常の表記を補った。

(1) 六執

次のように自注する。

俗にくさかんむりを加えるのは正しくない。時としてさらに下に「云」を加えるのは益々正しくない。^⑪

『説文解字注』三篇下「𠂔」部「執」字下には次のようにある。

執、種なり。𠂔牽に従ふ。𠂔持して之を種^⑫ゑる。

唐代の人は樹^⑬執という際の字を「藝」と表記した。説明は『經典釈文』に見える。際の字を「藝」と表記した。説明は『經典釈文』に見える。^⑭

しかしながら「藝」「藝」二字はいずれも『説文解字』に見えない。周の時代に六藝という際の字は、思うにやはり「執」と表記した。儒者にとつての礼、楽、射、御、書、数の素養を身につけることは、ちょうど農夫が樹^⑮執のと同じである。^⑯

江声の自注の趣旨は、段玉裁が「執」を「周の時代に六藝という際の字」とするのと同じだろう。

(2) 周室散而礼樂廢

ここで特異な用字は「散」である。『説文解字注』八篇上「人」部「散」字下には次のようにある。

散、眇⁽¹⁶⁾なり。

「眇」は各本とも「妙」と表記する。いま訂正する。総じて古に「散は眇」と言った「散」は、今微妙と言う際の「微」の字だ。「眇」とは「小」の意である。引伸して一般に細かなものをいう。「微」とは隠れて行くことである。「微」が行われて「散」は廢れてしまった。『玉篇』（卷三、人部第二十三）に「微^(マ)」字があり、引用する『尚書』の「虞舜側微^(マ)」の「微^(マ)」は、やはり「散」の俗字体である。⁽¹⁷⁾

『説文解字注』二篇下「イ」部「微」字下には次のようにある。
微、隱行なり。⁽¹⁸⁾

「散」の訓は「眇」、「微」は「イ」に従い訓は「隱行」、仮借して「微」を「散」の意味でも用いるようになり「散」は行われなくなった。⁽¹⁹⁾

段玉裁は「細^カか」を意味する字が本来「散」であり、仮借通用の結果「隠れて行くこと」を意味する「微」が行われて「散」は廢れてしまったとしている。江声の用字の趣旨はそれに同じだろう。

「尚書集注音疏述」と『説文解字注』の符合挙例(吉田)

(3) 礼誼

ここで特異な用字は「誼」である。『説文解字注』三篇上「言」部「誼」字下には次のようにある。

誼、人の宜^{うべ}なふ所なり。⁽²⁰⁾

『周礼』春官肆師の鄭玄注に、「故書は〔礼儀〕の〔儀〕を『義』と表記する。鄭衆が云う、『義』は『儀』と音も意味も同じに読む、古は、『儀』と書くところを単に『義』と表記し、今の時代に『義』を意味するのを『誼』と表記した」とある。考えるにこれはつまり「誼」「義」は古今字の関係にある。周の時代に「誼」と表記し、漢の時代に「義」と表記した。いずれも現在「仁義」という際の意味である。現在「威儀」という際の「儀」字は周の時代に「義」と表記し、漢の時代に「儀」と表記した。一体に経伝を読む者は古今字を知らない訳にはゆかない。古今に固定した時代は無く、周が古なら漢は今であり、漢が古なら晋宋が今である。時代につれて運用を異にするものを古今字と言うのであって、今時の人が言うように古文籀文を古字とし、小篆隸書を今字とするのではない。「誼」は「人の宜なふ所」と云うので許慎は「誼」を仁義という際の「義」の字の意味だと考えている。⁽²¹⁾

段玉裁が「『誼』『義』は古今字の関係にある。周の時代に『誼』と表記し、漢の時代に『義』と表記した」としているのは、江声の用字の趣旨に同じだろう。

(4) 壁臧

次のように自注する。

俗に上にくさかんむりを加えるのは正しくない。⁽²²⁾

『説文解字注』三篇下「臣」部「臧」字下には次のようにある。

臧、善なり。⁽²³⁾

一体に物で善いものは必ず内に隠れる。「艸」に従う^(マ)「臧」を臧匿^{かくす}の意味の字とするのは漢代末に始まり、経典を改変するのだが、従うことができない。⁽²⁴⁾

「臧」は大徐本の新附字である。『説文解字』一篇下「艸」部

「臧」字下には次のようにある。

臧、匿なり。⁽²⁵⁾

臣鉉等が考えますに、『漢書』では「臧」字と通用する。

「艸」に従うのは後の人が加えたものである。⁽²⁶⁾

『説文解字注』の所説は江声の自注の趣旨に同じかろう。

(5) 遼書

ここで特異な用字は「遼」である。『説文解字注』二篇下「禾」部「遼」字下には次のようにある。

遼、遷徙するなり。⁽²⁷⁾

今人は「禾の相倚移す」が本義の「移」を、仮借で遷遼という際の「遼」字の代わりにしている。⁽²⁸⁾

『説文解字』七篇上「禾」部「移」字下には次のようにある。

移、禾の相倚移するなり。⁽²⁹⁾

段玉裁の「遼」字下の所説は江声の用字の趣旨に同じかろう。

(6) 漆書

ここで特異な用字は「漆」である。『説文解字注』六篇下「漆」部「漆」字下には次のようにある。

漆、木汁なり。已て物を髹るべし。⁽³⁰⁾

木汁を「漆」の名で呼ぶ。そこでその木を名づけて「漆」という。今の字は「漆」と表記して「漆」は廃れてしまった。

「漆」は川の名称である。木汁ではない。『毛詩』(鄘風、定之方中、首章、「椅桐梓漆」)、『尚書』(禹貢、「厥貢漆絲」)の梓漆、漆絲の「漆」をいずれも「漆」と表記するのは俗な手合いが今字で改易したのである。『周礼』地官載氏「漆林の征は二十にして五」の鄭玄注で鄭衆が言う、「故書では漆林を漆林と表記する」、杜子春が云う、「漆林と表記しなければならぬ」、これからすると漢代の人は二字を厳しく辨别していた。今の注疏は誤っているので、このように正す。⁽³¹⁾

『説文解字』十一篇上「水」部「漆」字下には次のようにある。

漆、漆水なり。右扶風杜陵岐山より出づ。東のかた渭に入る。⁽³²⁾

段玉裁が前の「散」字に同じく「漆」字が廃れてしまったと説明しているのは、江声の用字の趣旨に同じかろう。

(7) 淵、𧈧于孔氏

次のように自注する。

𧈧は「原」の古文である。⁽³³⁾

『説文解字注』十一篇下「𧈧」部「𧈧」字下には次のようにある。

𧈧、水本なり。𧈧の「厂」下に出づるに从ふ。⁽³⁴⁾

各本とも「水泉本也」と表記する。いま「泉」字を削除して訂正する。『礼記』月令の「百源」の鄭玄注に「衆水始めて出づる所を百源と為す」とある。一言でとえて「原」であり、重ねてとえて「原泉」である。『孟子』離婁下の「原泉混混」がそれに当たる。⁽³⁵⁾

原、篆文泉に从ふ。⁽³⁶⁾

これもやはり（一篇上で古文の）「二」を先にし（小篆の）「上」を後にするのと同様の例である。小篆では「原」と表記することから、「𧈧」字が古文、籀文であるのが分かる。後世の人は「原」を（二篇下「𧈧」部の、説解に）「高平を遶と曰ふ」の「遶」の代わりをして、別に「源」字をこしらえ「本原」という際の「原」と同義とした。「誤りに慣れ反って正しいと思ひ込」んで長く経つ。⁽³⁷⁾

「原」即ち「原」で、段玉裁の説明により江声はその古文の書体を用いたことが分かる。

「尚書集注音疏述」と『説文解字注』の符合挙例(吉田)

(8) 𧈧優

ここで特異な用字は「𧈧」である。『説文解字注』六篇下「邑」部「𧈧」字下には次のようにある。

𧈧、河東郡聞喜郷なり。⁽³⁸⁾

「郷」は各本とも「縣」と表記する。いま『広韻』（上平声「𧈧」字下）に「郷名、在聞喜」とあるのに依拠して訂正する。河東郡に聞喜県・城を置くのは『漢書』地理志、『後漢書』郡国志いずれも同じである。現在の山西省絳州聞喜縣が、漢の聞喜縣の故地である。『広韻』（上平声「𧈧」「裴」字下）に「郷の名なり。聞喜に在り。伯益の後、𧈧郷に封ぜらる。因りて以て氏と為す。後に徙りて解邑に封ぜらる。乃ち『邑』を去りて『衣』に従ふ」とある。思うに今の字は「裴」が行われて「𧈧」は廃れてしまった。⁽³⁹⁾

段玉裁が前の「泰」字に同じく「裴」が行われて「𧈧」は廃れてしまった」と説明するのは、江声の用字の趣旨に同じだろう。

(9) 𧈧百篇之叙

次のように自注する。

「𧈧」は俗に「散」と表記する。⁽⁴⁰⁾

『説文解字注』七篇下「𧈧」部「𧈧」字下には次のようにある。

𧈧、分離なり。⁽⁴¹⁾

（四篇下「肉」部）「𧈧」字、（十一篇上「水」部）「潜」が声

符としている。「𡵓」が行われて「𡵓」は廃れてしまった。⁽⁴²⁾

「𡵓」即ち「散」である。この段玉裁の所説も(8)と同様のもので、江声の用字の趣旨に同じだろう。

(10) 引冠篇𡵓

ここで特異な用字は「𡵓」である。『説文解字注』七篇下「𡵓」部「𡵓」字下には次のようにある。

𡵓、物初めて生ずるの題なり。⁽⁴³⁾

「題」は領である。人の体では領が最も上である。物の最初の現れは、その物の領に他ならない。古は発端という際の「端」の字を「𡵓」と表記した。今は「端」が行われて「𡵓」は廃れてしまった。なのに多くは「𡵓」を「専」の意味に用いている。『周礼』考工記、磬氏の「已下は則ち其の𡵓を摩す」が「𡵓」字を本義で用いている。『春秋左氏伝』文公元年伝の「端を始めに履む」は、仮借で「端」を「𡵓」の代わり⁽⁴⁴⁾にしている。

段玉裁が前の「𡵓」字と同様に「今は『端』が行われて『𡵓』は廃れてしまった」と説明しているのは、江声の用字の趣旨に同じだろう。

(11) 反庌鄭氏所述之二十四篇為張霸偽造
次のように自注する。

庌、昌石の反。俗に偽^{あやま}つて「斥」と表記する。⁽⁴⁵⁾

『説文解字注』九篇下「𡵓」部「庌」字下には次のようにある。

庌、屋を卻するなり。⁽⁴⁶⁾

「屋を卻する」とは、その家屋を開拓して広くすることである。(一字上の「𡵓」字の説解の)「屋迫る(なり)」と反対になる。『広韻』(入声「庌」字下)所引の『説文』は「卻行也」と表記するが、正しくない。「屋を卻する」という本義は引伸して「庌逐」の意味となり、「充庌」の意味となる。左思「魏都賦」李善注所引の『蒼頡篇』には「庌、広なり」とある。⁽⁴⁷⁾さらに引伸して「指庌」の意味となる。『春秋穀梁伝』僖公五年伝に「晋公を目^{ない}ひて殺すを庌す」とあるのがそれに当たる。⁽⁴⁸⁾

庌に从ふ、𡵓の聲。⁽⁴⁹⁾

『広韻』(同上)所引に「声」字が無いのは正しくない。……俗に「庌」「斥」と表記するが、字の態を成さぬのに近い。⁽⁵⁰⁾

段玉裁は「庌」字が「引伸して『指庌』の意味となる」ことを用例を挙げて示した上で、「俗に『斥』と表記するが、字の態を成さぬのに近い」と断定している。江声の自注の趣旨に同じだろう。

(12) 𡵓答「許慎」

次のように自注する。

「𡵓」は元来国の名であり、それで後に姓とした。音は「許」

と同じである。俗な手合いはそのまま「許」と表記するが、別字である。⁽⁵¹⁾

『説文解字注』六篇下「邑」部「鄒」字下には次のようにある。

鄒、炎帝大獄の胤甫侯封ぜらる。⁽⁵²⁾

炎帝神農氏の後裔が大獄である。(七篇下「呂」部)「呂」字下の説解に詳しい。大獄は呂に封ぜられ、その後裔胤侯もまた鄒に封ぜられた。「鄒」「許」は古今字の關係にある。『漢書』地理志に「潁川郡、許、故国、姜姓、四岳の後、太叔封ぜらる」とある。⁽⁵³⁾……

潁川に在り。⁽⁵⁴⁾

鄒が潁川許縣に在ることを言っている。潁川郡に許縣・城を置くのは『漢書』地理志、『後漢書』郡国志いずれも同じである。漢代には字を「許」と表記し、周代には字を「豊」と表記した。『史記』鄭世家に「鄒公鄭を楚に悪^{そし}る」とあるのは、思うに周代の字の名残を留めるものである。今『春秋』経、伝が「鄒」と表記しないのは、後の人が改変したのか、周代にはすでに仮借して「許」と表記してゐたのか、断定しかねる。「潁川許縣に在り」と言わないわけは、「許」が「鄒」と字形が異なっても字音が同じで、土地も古今同一だからである。現在河南省許州の東方三十里に旧許昌城址がある。⁽⁵⁵⁾

段玉裁は「『鄒』『許』は古今字の關係にある」と説明し、かつ

「尚書集注音疏述」と『説文解字注』の符合举例(吉田)

「漢代には字を『許』と表記し、周代には字を『豊』と表記した」と推察している。江声の自注の趣旨に同じだろう。

(13) 它

次のように自注する。

它、土加の反。俗には人偏に也が旁の字を書く。正しくない。⁽⁵⁶⁾

『説文解字注』十三篇下「它」部「它」字下には次のようにある。

它、虫なり。虫に从ひて長し。冤曲⁽⁵⁷⁾𧈧尾の形を象る。

「𧈧」は各本とも「垂」と表記する。いま訂正する。「𧈧」は(六篇下「𧈧」部「𧈧」字の説解にある通り)艸木花葉が𧈧れる意味である。引伸して一般に物が下𧈧するのを言う。「垂」は(十三篇下「土」部「垂」字の説解にある通り)遠邊のことであるからその意味ではない。「冤曲」は胴体で、「垂尾」は末部である。「虫」字は蝮がとぐろを巻いている形を象っているから、尾を屈曲させていて短い。「它」は上が「冤曲」していて下が「垂尾」なのを象っているから長い。尾を屈曲させているのを「虫」と言い、尾を垂れているのを「它」と言う。⁽⁵⁸⁾

……上古は艸𧈧すれば它を患ふ。故に相問ふ、它無きかと。⁽⁵⁹⁾

上古とは神農以前を言う。「相問ふ、它無きか」は、ちよう

ど後世の人の「恙あらず」「恙無し」と同じである。言葉が時と共に移り変わった結果、「它」無しを別条の無いことの意味に当てて、字は仮借で「佗」を当てる場合もあれば、また俗に「他」と表記する。經典は多くの場合「它」と表記する。ちょうど「彼」と言うのと同じである。許慎はこう言って仮借の例を説明している。⁽⁶⁰⁾

段玉裁の説明は、「佗」「他」とせず「它」と表記した江声の用字の趣旨に同じだろう。

(14) 𠂔百篇之敘

次のように自注する。

𠂔、求利の反。俗に通じて「暨」と表記する。⁽⁶¹⁾

『説文解字注』八篇上「𠂔」部「𠂔」字下には次のようにある。

𠂔、眾與の習なり。⁽⁶²⁾

「與詞」二字は各本とも逆さになっている。いま『広韻』（去声「𠂔」字下所引『説文解字』）に依拠して訂正する。「眾與」とは大勢と與にする^{とも}ことである。與にするのが一人でない。「詞」は（九篇上「司」部「習」字説解にある通り）意内言外（内に意思が有って言外に表すこと）を言う。「𠂔」は仮借で「洎」と表記することがある。鄭玄の毛詩譜（譜）（商頌譜）に引く『尚書』無逸に、「爰に小人と洎に」とあるのがそれに当たる。また仮借で「暨」（やむを得ずともにする）

る意」と表記する。『春秋公羊伝』隠公元年伝に「及」は何ぞや、「與」なり。『會』『及』『暨』、皆「與」なり」「暨」、猶ほ『暨暨』のごときなり」とある通りである。『爾雅』釈詁下に「暨」、「與」なり」とある。釈訓に「暨」、及ばざるなり」とある。思うに「及ばざるなり」は「及」である。『春秋公羊伝』に言う「猶ほ『暨暨』のごときなり」である。⁽⁶³⁾

段玉裁は「暨」字を本字の「𠂔」に対する仮借字と説明している。江声の自注の趣旨に同じだろう。

(15) 𠂔

次のように自注する。

𠂔、知流の反。今は通用で周と表記する。⁽⁶⁴⁾

『説文解字注』九篇上「𠂔」部「𠂔」字下には次のようにある。

𠂔、𠂔偏なり。⁽⁶⁵⁾

「偏」は衍字、削除すべきである。（六篇下の）「𠂔」字下に「𠂔なり」とあって（互訓であるから）、この字と転注の関係にある。𠂔^{めく}って偏^{あまね}くないのは無いから、わざわざ「偏」を言うまでもないのだ。𠂔は周と字義が別である。（『説文解字』二篇上）口部（の説解）に「周は密なり」とある。周は中がぎつしりと密であることから（偏しを）言い、また𠂔は外の𠂔^{まわり}を限なくひとめぐりすることから（偏しを）言う。一体に円の一周、方形の一周は、一周^{まわ}りしたのち再び始まる。

（周の字は）𠂔と表記すべきであり、隈なくひとめぐりして元に戻るのを言うのである。一体に（形体の）圖𠂔、方𠂔、積𠂔のことを、周と言う。それらがぎっしりつまって僅かな隙間も無いことを言うのである。『春秋左氏伝』（昭公二十年伝）で（清濁、……出入、）周・疏を反対語としているのが、その意味である。今の字は周が流行って𠂔は廃れてしまった。⁽⁶⁶⁾

段玉裁は「今の字は『周』が流行って『𠂔』は廃れてしまった」と説明している。江声の自注の趣旨に同じだろう。

(16) 𠂔三韻

次のように自注する。

𠂔、相𠂔の反、待なり。俗に通じて「須」と表記する。⁽⁶⁷⁾

『説文解字注』十篇下「立」部「𠂔」字下には次のようにある。

𠂔、立ちて待つなり。⁽⁶⁸⁾

『古今韻会举要』（卷三、平声上、「𠂔」字下）により「立而」二字を補足した。今の字は大方「需」と表記し「須」と表記して、「𠂔」は廃れてしまった。（『説文解字』十一篇下）雨部「需」字の説解に、「需、𠂔なり。雨に遇ひて進まず止𠂔するなり」とあり、『周易』経上、需卦象伝の「雲の天に上るは需なり」を引くが、需は「𠂔」と音、意味いずれも同じである。（孔子の弟子の）樊遲は名を須といい、須は

「尚書集注音疏」と『説文解字注』の符合举例（吉田）

「𠂔」の仮借字である。「𠂔」字は僅かに『漢書』翟方進伝に「方進……下車立、𠂔過」と見える。⁽⁶⁹⁾

段玉裁は上の「𠂔」字に同じく「𠂔」は廃れてしまった」と説明している。江声の自注の趣旨に同じだろう。

以上、十六条について『尚書集注音疏』中の特異な用字を『説文解字注』と照らし合わせた結果、江声の趣旨は段玉裁の所説と合うことが分かった。

更に注目すべき例として、『説文解字注』の中に直接江声の名を挙げ、その所説を引用している箇所が存在する。八篇上「从」部「从」字下に次のようにある。

从、相聽^{ゆゑ}なり。⁽⁷⁰⁾

「聽」は「聆」である。引伸して相許すことを言う。（『説文解字』三篇上「言」部）「許」字の説解に「聽なり」とある。思うに「从」は今の「從」字である。「從」が行われて「从」は廃れてしまった。『周礼』秋官、司儀の「客朋ふ、朝に拜辱す」（の「朋」字）は陸德明『經典釈文』の依拠する本がこの通りである。⁽⁷¹⁾『説文解字』で一体に「某に从ふ」と云うのを、大徐本は「从」と表記し、小徐本は「從」と表記する。江氏声は「『从』と表記するのが正しい。同類のものがともにすることを『从』という」と言う。⁽⁷²⁾

これは主著『尚書集注音疏』からの引用であろうか。先に掲げた

『六書説』一卷、および師である惠棟の所説を補った『惠氏説説文記』十五卷を通覧した結果、類似的論説は見られなかった。『尚書集注音疏』は東晋晩出の二十五篇を除いた二十九篇と百篇叙および逸文を対象にしているが、『尚書』のその範囲に「从」字は三十三ある。その全てを仔細に調査した結果、『説文解字』の「从」に言及したのが一箇所見られた。

○女母面从、很有後言（答繇暮）

〔注〕从、聽なり。⁷³⁾

〔疏〕『説文解字』（「从」字の説解に）「二人に从ふ」「相聽すなり」と言う。だからこそ从、聽なりと言うのである。順从であることを意味する。⁷⁴⁾

しかしこれは上に挙げた『説文解字注』に引く所説とは異なる。かと言つてそれが直ちに『説文解字考証』からの引用と見なすには根拠に乏しい。

『説文解字注』に見る十六例は、初めに掲げた孫星衍による伝に「段玉裁大令が著したものに図らずも符合する内容が多いのを見てそのまま筆を擱き原稿を全て差し出して段玉裁に与えた」とあるので、両者別々に研究した結果が符合していたと考えるべきである。こうした例を『尚書集注音疏』全書に求めることも今後の課題となろう。しかしより興味深いのは、『説文解字注』に引く江声説の更なる探索である。それによって江声の説文学の一端を窺うことができるからである。

キーワード…尚書、説文解字、江声、段玉裁

十二

注

- (1) 狩野直喜『中国哲学史』、岩波書店、一九五三年、五五五頁。
- (2) 湯征は伏生所伝、孔安国「得多」の「十六篇」(『漢書』藝文志、六藝略、尚書序)、及び東晋晩出の二十五篇に無く、序のみ存するもので、『孟子』滕文公下篇より一条、梁惠王下篇より二条、『史記』殷本紀より一条を採る(『尚書集注音疏』卷四)。江声は泰誓後得の説(『尚書序』孔穎達疏所引劉向「別録」)に従い、伏生所伝には泰誓が無いと考え、『尚書大伝』その他から佚文を収録している(同巻五)。
- (3) 江声、字叔漢、号良庭、江蘇元和人。漢江革五十七世孫、六世祖禹璽、自休甯遷吳門、有孝行、載在方志。曾祖大浙。祖文懋。父黔。生声、凡有兩兄一弟。声弱不好弄、聰慧絕倫、七歲就傳讀書、問讀書何為、師以取科第為言、声求所以進于是者。父故為治業、既折閱、居無錫、声與兄授徒為養。年二十九、遭父疾、晨夕侍牀褥不解衣帶、手制藥餌、至自滌械、視穢以驗疾進退。及居憂、哀毀骨立、逾三年、容戚然如新喪者。侍母疾、居喪、亦如父歿時、族黨哀其至行。既孤、因不復事科舉業、獨好經義古學、得許氏説文、説而習之、曰、「吾始知讀書當先識字也。」年三十、師事同郡惠徵君棟、質疑難、居門下、學日以進。年四十一、始為尚書之學、病瘳貞觀時為諸經正義、自詩、礼、公羊外、皆取晋人後出之注、而漢儒專家師説反不伝。惠徵君既作周易述、搜討古字、声亦撰尚書集注音疏、存今文二十九篇、以別梅氏所上二十八篇之偽造、取書伝所引湯征、太誓諸篇逸文、按書序入録、又採説文經子所引書古文本文字、更正秦人隸書及唐開元改易古字之謬、輯鄭康成殘注及漢儒逸説、附以己見而為之疏、以明其説之有本、以篆寫經、復三代文字之旧、凡四易稿、積十餘年、雖有小疵而大醇不可掩矣。時王光祿鳴盛撰尚書後案、亦以疏通鄭説、考究古學為書、延声至家商訂疑義、始以行世焉。声又病後世深求考

老、軛注之義、至以篆迹求之、因為六書說、謂建類一首、即始一終亥、五百四十部之首也、同意相受、即凡某之屬皆從某也。嘉定錢判官坫題之。予亦推其說、以為爾雅肇祖元胎之屬始也、始亦建類一首、肇祖元胎皆為始、亦同意相受、說文此類亦甚多、推考老之訓、如口部之咽嚙也、噬咽也、走部之走趨也、趨走也、猶之考注老、老軛注考矣。其同在口部、走部、即建類一首也。声亦以為然、而戴編修震以為貫全部則義太広。声折之曰、若止考老為軛注不已隘乎、且諧声一義不貫全部乎。声與戴君以學問相推重、其不相附和如此。又為說文解字考証、及見段大令玉裁所著多自符合、遂綴筆并舉彙本付之。

(4) 河野六郎「軛注考」(初出一九七七、『河野六郎著作集』第三卷所収、平凡社、一九八〇)一二七―一四四頁を参考にした。

(5) 軛注則由是而軛焉、如挹彼注茲之注、即如考老之字、老属会意、人老則須髮變白、故老從人毛匕、此亦合三字為誼者也、立老字以為部首、所謂建類一首、考與老同意、故受老字而從老省。考字之外、如耆耄壽耆之類、凡與老同意者、皆從老省而屬老、是取一字之意、以概數字、所謂同意相受、叔重但言考者、舉一以例其餘爾、由此推之、則說文解字一書、凡分五百四十部、其分部即建類也、其始一終亥五百四十部之首、即所謂一首也、下云凡某之屬从某、即同意相受也、此皆軛注之說也。

(6) 古国順『清代尚書學』(文史哲出版社〔台北〕、一九八一)、一三一頁。

(7) 好尚新奇之輩、自唐至今、有集古篆繕写之。

(8) 必改從說文則非漢人之旧、且或取經伝諸子所傳尚書以改尚書、是尚書身無完膚矣。

(9) 說文解字所傳尚書、多不與經同、由孔安国以今字說易其字而許君存其旧。如周礼經杜子春二鄭說易其字、伝写者既從所說而注中存其故書之旧。周礼不得尽改從故書、則尚書不得尽改從說文也。

(10) 生平不作楷書、即與人往來筆札、皆作古篆、見者訝以為天書符籙、俗儒往往非笑之、而先生不顧也。

(11) 名古屋大学所蔵。封面左上に篆字で「疏通知遠而不誣」、左下に「近市尺臧版」とある。孫殿起『販書偶記』卷一、書類に尚書集注音疏十二卷

「尚書集注音疏述」と『說文解字注』の符合举例(吉田)

尚書經師系表一卷、を著録し、「卷一第二頁十三行癸公羊墨守箴左氏膏肓起穀梁廢疾以難何休等十九字後印、本移在前十一行。錯乱不堪、印工亦劣」と指摘する通りの後印本である。

(12) 俗加草頭、非也。或又于下加云、益非。

(13) 執、種也。从𠂔奎。𠂔持種之。

(14) 『毛詩』齊風、南山、第三章に「蓺麻如之何」とあり、『經典釈文』毛詩音義上に「蓺、樹也。本或作藝、技藝字耳」とある。

(15) 唐人樹執字作蓺、六執字作藝、說見經典釈文。然蓺藝字皆不見說文、周時六藝字蓋亦作執、儒者之於札樂射御書數、猶農者之樹執也。

(16) 散、眇也。

(17) 眇、各本作妙、今正。凡古言散眇者、即今微妙字。眇者、小也。引伸為凡細之稱。微者、隱行也。微行而散廢。玉篇有微字、引書虞舜側微、亦散之俗体也。

(18) 微、隱行也。

(19) 散訓眇、微从彳、訓隱行、段借通用微而散不行。

(20) 誼、人所宜也。

(21) 周礼肆師注故書儀為義、鄭司農云義讀為儀、古者書儀但為義、今時所謂義為誼。按此則誼義古今字。周時作誼、漢時作義、皆今之仁義字也。其威儀字、則周時作義、漢時作儀。凡說經伝者、不可不知古今字。古今無定時、周為古則漢為今、漢為古則晉宋為今。隨時異用者謂之古今字、非今人所謂古文籀文為古字、小篆隸書為今字也。云誼者人所宜、則許謂誼為仁義字。

(22) 俗加艸頭于上、非也。

(23) 臧、善也。

(24) 凡物善者必隱於内也。以從艸之藏為臧匿字始於漢末、改易經典、不可從也。

(25) 藏、匿也。

(26) 臣鉉等案、漢書通用臧字、从艸後人所加。

(27) 逖、遷徙也。

- (28) 今人假禾相倚移之移為遷彳字。
- (29) 移、禾相倚移也。
- (30) 黍、木汁、可已鬻物。
- (31) 木汁名黍、因名其木曰黍。今字作漆而黍廢矣。漆、水名也、非木汁。詩書梓黍、黍絲皆作漆、俗以今字易之也。周礼載氏黍林征二十而五、大鄭曰、故書黍林為漆林、杜子春云、當為黍林、是漢人分別二字之蔽。今注疏譌舛、為正之如此。この原文の黍、漆は「周礼」注と逆である。訳文では訂正した。
- (32) 漆、漆水也。出右扶風杜陵岐山。東入渭。
- (33) 麤、古文原。
- (34) 麤、水本也。从麤出厂下。
- (35) 各本作水泉本也。今刪正。月令百源注曰、衆水始所出為百源。單評曰原、篆評曰原泉。孟子原泉混混是也。
- (36) 原、篆文从泉。
- (37) 此亦先二後上之例。以小篆作原、知麤乃古文籀文也。後人以原代高平曰遷之遷、而別製源字為本原之原。積非成是久矣。「積非成是」は戴震「原善序」に見える言葉。
- (38) 蕞、河東郡聞喜鄉。
- (39) 鄉各本作縣、今依広韵正。河東郡聞喜、二志同。今山西絳州聞喜縣、漢縣地也。広韵曰、蕞、鄉名、在聞喜。伯益之後封於蕞鄉、因為氏、後徙封解邑、乃去邑從衣。按今字裴行而蕞廢。
- (40) 械、俗作散。
- (41) 械、分離也。
- (42) 散、潛字以為聲。散行而械廢。
- (43) 耑、物初生之題也。
- (44) 題者、額也。人体額為最上。物之初見即其額也。古兌端字作此、今則端行而耑廢、乃多用耑為專矣。周礼磬氏已下則摩其耑、耑之本義也。左伝、履端於始、假借為耑也。
- (45) 庌、昌石反。俗偽為斥。
- (46) 庌、卻屋也。
- (47) 「文選」卷六、左思「魏都賦」に「墳衍斥斥」とあり、李善注に引く「蒼頡篇」には「斥、大也」とある。
- (48) 卻屋者、謂開拓其屋使庌也。與上屋迫成反对。広韵引作卻行也、非是。卻屋之義引伸之為斥逐、為充斥。魏都賦注引倉頡曰、庌、庌也。又引伸為指庌。穀梁僖五年伝曰、目晋侯斥殺是也。
- (49) 从尸、𠂔声。
- (50) 広韵引無声字非是。……俗作庌、斥、幾不成字。
- (51) 𡇗本国名、後因為氏。讀若許。俗竟作許、別字矣。
- (52) 𡇗、炎帝大獄之胤甫侯所封。
- (53) 炎帝神農氏之裔子為大獄。詳呂部下。大獄封於呂、其裔子甫侯又封於𡇗。𡇗、許古今字。前志曰、潁川郡、許、故国、姜姓、四岳後、太叔所封。……
- (54) 在潁川。
- (55) 謂𡇗在潁川許縣也。潁川郡許、二志同。漢字作許、周時字作𡇗。史記鄭世家、𡇗公惡鄭於楚、蓋周字之存者。今春秋經、伝不作𡇗者、或後人改之、或周時已假借、未可定也。不曰在潁川許縣者、其字異形同音、其地古今一也。今河南許州州東三十里有故許昌城。
- (56) 它、土加反。俗作人傍也、非是。
- (57) 它、虫也。从虫而長。象冤曲𡇗尾形。
- (58) 𡇗、各本作垂、今正。𡇗者、艸木華葉𡇗也。引伸為凡物下𡇗之稱。垂者遠邇、非其義。冤曲者其体、垂尾者其末。虫象其臥形、故詘尾而短。它象其上冤曲而下垂尾、故長。詘尾謂之虫、垂尾謂之它。……
- (59) 上古舛尻患它。故相問無它乎。
- (60) 上古者、謂神農以前也。相問無它、猶後人之不恙無恙也。語言転移、則以無別故當之、而其字或段佗為之、又俗作他。經典多作它、猶言彼也。許言此以說段借之例。
- (61) 𡇗、求利反。俗通作𡇗。
- (62) 𡇗、眾與𡇗也。

- (63) 與詞各本誤倒、今依廣韻正。眾與者多與也。所與非一人也。詞者意內言外之謂。或假汨為之。如鄭詩謚僖無逸爰汨小人是也。又假暨為之。如公羊伝及者何。與也。會、及、暨、皆與也。暨猶暨暨也。釋詁曰、暨、與也。釋訓曰、暨、不及也。按、不及、及也。即公羊所謂暨暨也。『春秋公羊伝』隱公元年伝の下文は以下の通りである。及、猶汲汲也。暨猶暨暨也。及、我欲之。暨、不得已也。
- (64) 匄、知流反。今通作周。
- (65) 匄、帀偏也。
- (66) 徧衍文、當刪。帀下曰、匄也、與此為軫注。帀則無不徧者、不待言徧也。匄與周義別。口部曰、周者密也。周自其中之密言之。匄自其外之極復言之。凡圀周、方周、周而復始。其字當作匄。謂其極而復也。凡圀、方、積、積、謂之周。謂其至密無疏罅也。左伝以周疏對文、是其義。今字周行而匄廢。
- (67) 𦉰、相兪反、待也。俗通作須。
- (68) 𦉰、立而待也。
- (69) 依韻會補立而二字。今字多作需、作須、而𦉰廢矣。雨部曰、需、𦉰也。遇雨不進止𦉰也。引易雲上於天需、需與𦉰音義皆同。樊遲名須、須者𦉰之假借、𦉰字僅見漢書翟方進伝。
- (70) 从、相聽也。
- (71) 周礼音義下「客𦉰」下に「本又作從」とある。
- (72) 聽者、聆也。引伸為相許之僦。言部曰、許、聽也。按从者今之從字。從行而從廢矣。周礼司儀、客𦉰拜辱於朝、陸德明本如此。許書凡云从某、大徐作从、小徐作從。江氏聲曰、作从者是也。以類相與曰从。
- (73) 从、聽也。
- (74) 説文从部云、从二人、相聽也。故云从、聽也。謂順从。

Abstract

Examples of Correspondence between *Shang-shu ji-zhu yin-shu shu* 尚書集注音疏述
and *Shuo-wen jie-zi zhu* 說文解字注

YOSHIDA, Jun

As Naoki Kano 狩野直喜 told in his *History of Chinese Philosophy* 中国哲学史, Jiang Sheng 江声 gave Duan Yu-cai 段玉裁 the whole manuscript that he wrote about *Shuo-wen jie-zi* 說文解字. There are a lot of unusual Chinese characters in Jiang's *Shang-shu ji-zhu yin-shu shu* 尚書集注音疏述, and they are often found in Duan's *Shuo-wen jie-zi zhu* 說文解字注. This paper enumerate those examples and consider the relation between both.

Keywords: *The Book of Documents*, *Shuo-wen jie-zi*, Jiang Sheng, Duan Yu-cai